

答申や報告書における体験活動の記述（学習指導要領の改善について）

学習指導要領の改善について＝中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（答申）H20.1

	小学校			中学校	高等学校
	低学年	中学年	高学年		
発達の段階に応じた学校段階間の円滑な接続	小学校低学年の時期は、幼児期的な特性を残しながらも、言葉と認識の力が広がり、ある程度、時間と空間を越えた見通しがもてるようになる。例えば、算数の時間なら、数の問題に集中できるというように、数や言葉についての発達が進み、半具体物（タイルなど）を使って抽象的に考えていくことも多少は可能になる。	小学校中学年以降になると、幼児期を離れ、物事をある程度対象化して認識することが可能となっていく。対象との間に距離をとって分析できるようになり、知的な活動も分化した追究が可能になる。自分のことも距離をもってとらえられるようになることから、自分と対象とのかかわりが新たな意味をもつようになる。	中学生になるころに、思春期に入り、親や周りの友達と異なる自分独自の内面の世界があることに気付いていく。また、内面の世界が周りの友達にもあることに気付き、友人との関係が自分に意味を与えてくれると感じる。さらに、未熟ながらも大人に近い心身の力をもつようになる。大人の社会とかかわる中で、大人もそれぞれ自分の世界をもちつつ、社会で責任を果たしていることへの気付きへと広がっていく。	高校生になると、思春期の混乱から脱しつつ、大人の社会を展望するようになる。自分は大人の社会でどのように生きるかという課題に出会う。進学や就職といったそれぞれの人生を左右する重要な岐路に立って、進学を過度に意識してその準備に追われたり、自分の将来について真剣に考えることを放棄して目の前の楽しさだけを追い求めたりすることに陥る者もいる。大きく力が伸びる高校生の時期において、例えば体験活動は、その視野を広げ、社会の中で責任をもって生きることへの自覚を促していくものであることが期待される。	
道徳教育の充実	小学校においては生きる上で基盤となる道徳的価値観の形成を図る指導を徹底するとともに自己の生き方についての指導を充実することに配慮する必要がある。			中学校においては思春期の特質を考慮し、社会とかかわりを踏まえ、人間としての生き方を見つめさせる指導を充実することに配慮する必要がある。	高等学校においては社会の一員としての自己の生き方を探求することなど人間としての在り方生き方についての自覚を一層深める指導を充実することに配慮する必要がある。
体験活動の充実	小学校においては、学年が上がるにつれて、自分のことも距離をもってとらえられるようになることから、自分と対象とかかわりが新たな意味をもつ。			中学校になると、未熟ながらも大人に近い心身の力をもつようになり、大人の社会とかかわる中で、大人もそれぞれ自分の世界をもちつつ、社会で責任を果たしていることへの気付きへと広がっていく。	高校生になると、思春期の混乱から脱しつつ、大人の社会を展望するようになり、自分は大人の社会でどのように生きるかという課題に出会う。
（前略）学校教育においては、	自己が明確になり、自覚されるようになる小学校の時期においては、自然の偉大さや美しさに出会ったり、身近な学校の仲間とかかわりを深めたりする自然の中での <u>集団宿泊活動</u> を重点的に推進することが適当である。			大人が社会で責任を果たしていることに気付き、進路を自分の問題として考え始める中学校の時期においては、職場での体験を通して社会の在り方を垣間見ることにより勤労観・職業観をはぐくむ <u>職場体験活動</u> を重点的に推進することが適当である。特に職場体験活動は、キャリア教育の視点からも重要な役割を果たすものである。	自分と他者や社会との関係について考えを深める高等学校の時期においては、人に尽くしたり社会に役立つことのやりがいを感じることで、自分の将来展望や社会における自分の役割について考えを深めることが期待できる <u>奉仕体験活動</u> や <u>就業体験活動</u> を重点的に推進することが適当である。特に就業体験活動は、キャリア教育の視点からも重要な役割を果たすものである。

答申や報告書等における体験活動の記述(長期宿泊活動の手引き)

長期宿泊活動の手引き = 国立青少年教育振興機構「体験を通して学ぶ教科学習のすすめ - 学校教育における「長期宿泊活動」の手引き - H20.6

	小学校			中学校	高等学校
	低学年	中学年	高学年		
体験活動と成長の過程	<p>周囲とのかかわりが繰り返される中で「おや、なぜ、どうして」と疑問や問いが生まれてくる。つまり、物事の本質に迫る気付きが生じてくる。例えば・・・ 気付きは、問いを媒介に理解へと深まっていく。そのことをまた言葉で言い表そうとする。絵で表現したり、言葉でまとめて発表したりと、言葉と認識の力がついてくる。体験から概念へ、感性から知識へと認識が深まっていく。</p>	<p>自分と自分、自分と仲間や他の人々、自分と社会、体験と教科学習、体験活動の学習の振り返りなどと、低学年のように一体化し、没入していくのではなく、一定の距離や間隔をもって両者のかかわりや関係を見てとれるようになり、物事を対象化して冷静に分析したり、理解できたりするようになる。それだけに、より知的な認識が深まる。</p> <p>例えば、小学校高学年になると、「自分を見るもう1人の自分」が誕生し(メタ認知)自分の行動がこれでよかったか、どう振る舞うべきだったかを冷静に分析し、考えるようになる。そこに悩みや不安も生まれてくる。また体験したことをこれまで教科などで学んだ知的枠組の中に位置づけ、理解しようとし、うまく説明できないと新しい知的枠組を再構成しようとする。また人とかかわりにおいては、相手は自分をどうみているのだろうと、相手の立場に立って考えることができるようになり、思いやりが生まれてくる。</p>	<p>中学生においては、大人社会に参加することにより、一定の役割や責任を果たすことの意義を体験的に学ぶという「社会を見る眼」を育てるとともに、その大人社会に参加していく自分の在り方・生き方を見つめるといふ「自分を見る眼」をはぐくんでいくことに焦点がおかれる。</p>	<p>高校生になると、大人社会の入り口にある。社会貢献活動が主体になり、自ら地域の社会づくり、活性化に貢献し、豊かな町づくりに主体的にかかわっていくことに焦点がおかれる。学んだ知識や技能を生かし、自分の力を伸ばし、挑戦していく。そうした中で、自分への誇りと生きることへの自信を獲得していくことが望まれる。</p>	

答申や報告書における体験活動の記述(体験のススメ)

体験のススメ＝文部科学省「体験活動事例集 - 体験のススメ(平成17年・18年豊かな体験活動推進事業より)」H20.1

小学校低学年	小学校高学年	中学校	高等学校
<p>小学校低学年で展開される体験活動は、幼児期での体験活動と類似しながらも、そこからの発展が見られる時期である。体験活動の期間を少し空けても、記憶の中で関連のあるものをつなげられるようになってくるので、例えば、学校行事との関連を図って、類似したり関連の深い活動を続けていくことで、気づきが定着したりまとまったりしながら、やがて理解として成り立っていくようにすることが大切である。</p>	<p>高学年になると、幼児期を離れ、物事のある程度対象化して認識することが可能になってくる。自分のことも客観的に捉えられるようになることから、自分と対象との関わりが新たな意味を持つようになる。また、自分がやりたいと考えて、選び、繰り返しそれについて思いをめぐらし、その活動を展開する中で、活動は深まり、達成感が得られる。全身で関わる中で、その活動が自分のものだと思えてくる。</p>	<p>思春期に入り、親や周りの友達と異なる自分独自の内面の世界に気付いていく。内面の世界が周りの友達にもあることに気づき、友人との関係が自分に意味を与えてくれると感じる。このような時期には、自分の内に生まれる思いを何らかの表現手段により表していくことが重要である。例えば、言葉や造形、音楽などの表現は、自分のあいまいだが微妙で複雑な何かを表す手立てとなっていく。表現活動にも十分取り組めるようにするなど、体験活動を工夫することが考えられる。</p>	<p>高校生になると、大人の社会を展望できるようになり、自分が大人の社会でどのように生きるのかという課題に出会う。大きく力が伸びる高校生の時期において、体験活動はその視野を広げ、社会の中で責任を持って生きることへと目を開かせていけるものとするよう、体験活動のあり方を工夫し、自らの可能性を試すことに挑戦させたい。体験活動を通じて、自らの限界に挑戦することにより、将来社会の中で生きて働く力を伸ばせる機会を持つことが期待される。</p>
<p>この時期の体験活動は、どのような場で行われるかで意味が異なってくる。同じ遊びでも、いつもの広場ですか、目新しい公園ですかで印象が変わってくる。たまたま出会った一つの場面の印象がずっと心に刻まれることもある。一方、なじみのあるところでは、繰り返し出会うことを通して、多種多様な気づきが生まれ、それらの関連が形成でき、意味を考え、学びが発展していくことにつながる。子どもたちが活動の場に親しみ、愛着が生まれ、安心して活動できることが意味を持ってくる。</p>	<p>この時期の子どもたちは、社会的な広がりが増し、世の中の人々の生活などの様子が目に入ってくるようになる。また、自分の活動を世の中の人々の活動と重ね合わせ、つながりを感じることができるようになる。このため、社会に目を向け、多くの人々と関われるようにし、学校行事に総合的な学習の時間を関連させるなどして十分な時間を確保した上で、社会には様々な仕事や活動を真剣に追求している人たちがいることを理解させる。こうすることで、自分たちの体験活動に本気で関われるようになる。</p>	<p>この時期には、友人との関係が特別な意味を担ってくる。友人との関係を成長にとって意味の深いものにしていくことが求められる。いかにして対等の関係の中で、共同して新たなものを発見したり、作り出したりする関係を構築できるかが重要である。自分たちが探索し、考えていくことで、確かに自分たちの力で見出したという実感が得られるようにするとともに、そのことを通して、単なる仲良しの関係を「協同する」関係に転換し、また、協同する中で対立もあいつつ、共に作り出すことの意義を分かるようにしていきたい。</p>	<p>学校行事や総合的な学習の時間などで体験活動において、その問題にかかわる様々な場実際に出かけ、自分でやってみたり、調査したり、関係者と話し合ったりして、改めて問題について考え直してみる機会を設けることが考えられる。新聞や雑誌の記事で理解するのと、実際の現場を見てそこで様々なことに圧倒されながら再び調べ直すのでは、考えることの厚みが異なってくる。いろいろな専門家に実際に会って話を聞くなどして、<u>体験活動を社会の問題を深く考えることにつなげていくことができる。</u></p>

小学校低学年	小学校高学年	中学校	高等学校
<p>子どもたちの体験活動にふくらみを持たせるために、子どもたちの日常生活の場では見られなかったような対象と関わる活動に対しては、日常生活の場においてもそれらと出会い、体験活動と結びつけられるよう配慮したい。例えば、ある動物と出会う活動について、学校で上級生が飼育している動物と触れ合う機会が提供され、その後もその動物と繰り返し関わり、やがてどんな様子であるか観察したり、低学年なりに世話をしたりするといった活動に広がっていくことなどが考えられる。</p>	<p>体験活動を整理し、振り返って、その意味を把握することが可能になっていく。体験は一度きりであるが、繰り返し時間をかけて、体験の全体を振り返り、意味を考えることを通して、体験活動の価値はより高いものになっていく。そのためには、体験活動のその折々の様子を資料として保持するなどして、振り返りを可能にする手立てを工夫することが必要である。また、体験活動の意味を把握するために、自分なりに整理し、感じたことを文章にさせて、意味を考える働きを促すことも重要である。</p>	<p>子ども扱いを受けることで、責任感を持たず、受身で行動したり、学ぶことの意味を見失ったりする。この時期になると未熟ながら大人に近い心身の力を持つようになるので、大人の世界に加わり、共に働き、一定の役割や責任を担う体験をすることを通じ、社会の在り方を垣間見て、苦労もあるが生き甲斐もあることなどを分かるようにすることも大切である。また、学校行事や総合的な学習の時間を関連させるなど工夫して、自分たちが考えて取り組んだことの成果を社会に発表し、提案していくような活動を通して、体験活動の成果をできるだけ次の段階の活動につなげていくことが考えられる。</p>	<p>人に尽くしたり、社会に役立つことのやりがいを感じられる体験をすることが重要である。そのことは、相手に喜ばれて嬉しいし、気持ちがいよいことであるが、それを実行することは決して簡単ではなく、様々な工夫や努力、時間などを要し、苦労した分やりがいが増すことなどに気が付くようにしたい。</p>

答申や報告書等における体験活動の記述(青少年育成施策大綱)

青少年育成施策大綱 = 内閣府「青少年育成施策大綱」H20.12

学童期	思春期	青年期及びポスト青年期
<p>学童期には、後の成長の基礎となる体力・運動能力を身に付け、多様な知識・経験を蓄積し、家族や仲間との相互関係の中で自分の役割や連帯感などの社会性を獲得していくことが重要である。こうした考えに立ち、以下のような施策を行う。</p>	<p>思春期には、自分らしさを確立するために模索し、社会規範や知識・能力を習得しながら、大人への移行を開始することが重要である。こうした考え方に立ち、以下のような施策を行う。また、思春期にある若者の特性を踏まえ、適切な距離を保ちつつ成長を支援することや性差に応じたきめ細かな相談・支援を行うよう配慮するものとする。</p>	<p>青年期には、親の保護から抜け出し、就職することや家族を形成すること等を通じて、社会の一員として自立した生活を営むとともに、公共に参画し、貢献していくことが重要である。既に社会の担い手としての生活を送っている者も少なくない反面、大学等において社会の各分野を支え、発展させていく資質・能力を養う努力を続けている者や社会的自立に困難を抱え、何らかの支援を必要としている者が、青年期を過ぎた(ポスト青年期)者も含め、多数存在する。こうした考え方に立ち、以下の施策を行う。</p>
<p>(基本的な生活習慣の形成) 休養・睡眠、食事、運動、家事手伝いなど生活習慣の改善に向けた取組を学校内外において進める。特に、(・・・食育・・・)。また、学校における道徳教育や、青少年教育施設等における集団宿泊体験等を通じて規律ある生活をする態度を養う。</p>	<p>(基本的な生活習慣の形成) 休養・睡眠、食事、運動、家事手伝いなど生活習慣の改善に向けた取組を学校内外において進める。特に、(・・・食育・・・)。また、学校における道徳教育や、青少年教育施設等における集団宿泊体験等を通じて規律ある生活をする態度を養う。</p>	
<p>(体力の向上) 子どもの体力の向上を図るため、指導者の資質向上、体育専科教員や外部指導者の活用などにより、体育の授業を充実させる。また、体力等の全国的な状況の把握・分析を行い、その結果を踏まえ、学校や地域における体力の向上のための取組を推進する。子どもの遊び場やスポーツ・レクリエーション活動の拠点等となる都市公園や海辺、河川等の水辺、森林等における自然体験活動を推進する。</p>	<p>(体力の向上) 若者の多様なニーズにこたえ、体力の向上を図るため、指導者の資質向上などにより、保健体育の授業を充実させる。また、中学校保健体育の武道必修化に向けた条件整備を図り、武道が安全かつ円滑に実施できるよう取組を進めるとともに、複数校合同運動部活動の推進や外部指導者の活用などにより、運動部活動の充実を図る。さらに、体力等の全国的な状況の把握・分析を行い、その結果を踏まえ、学校や地域における体力の向上のための取組を推進する。スポーツ・レクリエーション活動等の活動拠点となる都市公園や海辺、河川等の水辺、森林等における自然体験活動を推進する。</p>	
<p>(コミュニケーション能力や規範意識等の育成) 思いやりの心、自分と異なる意見を持つ者や異なる立場の者とのコミュニケーション能力、生命や自然を大切にすることや他を思いやる優しさ、社会性、規範意識等を育てるため、発表・討論などの学習や道徳教育の充実、自然体験や集団宿泊体験等の体験活動の充実等、学校や青少年教育施設等における様々な機会の確保・充実を図るほか、非行防止教室等の取組を推進する。</p>	<p>(コミュニケーション能力や規範意識等の育成) 思いやりの心、自分と異なる意見を持つ者や異なる立場の者とのコミュニケーション能力、生命や自然を大切にすることや他を思いやる優しさ、社会性、規範意識等を育てるため、発表・討論などの学習や道徳教育の充実、自然体験や集団宿泊体験等の体験活動の充実等、学校や青少年教育施設等における様々な機会の確保・充実を図るほか、非行防止教室等の取組を推進する。</p>	

学童期	思春期	青年期及びポスト青年期
<p>(環境教育) 関係府省や地方公共団体が連携し、家庭、学校、地域、企業等における生涯にわたる環境教育・学習の機会の多様化を図るとともに、指導者の質の向上を図る。青少年教育施設等においては、豊かな自然環境を生かし、子どもの環境教育の拠点として、取組の推進を図る。</p>	<p>(環境教育) 関係府省や地方公共団体が連携し、家庭、学校、地域、企業等における生涯にわたる環境教育・学習の機会の多様化を図るとともに、指導者の質の向上を図る。青少年教育施設等において、豊かな自然環境を生かし、青少年の環境教育の拠点として、取組の推進を図る。</p>	
<p>(学校での特別活動の推進) 児童が学級活動や児童会活動等の集団活動を通して、集団や社会の一員としての自主的、実践的な態度を身に付けるため、学校における特別活動を推進する。</p>	<p>(学校での特別活動の推進) 生徒が学級活動や生徒会活動等の集団活動を通して、集団や社会の一員としての自主的、実践的な態度を身に付けるため、学校における特別活動を推進する。</p>	
<p>(都市と農山漁村の共生・対流の促進) 子どもたちの学ぶ意欲や自立心、思いやりの心、規範意識などはぐくみ、力強い成長を支え、更に農山漁村や農林水産業への関心と理解を促すため、学校における体験活動や地域活動での体験学習を推進するとともに、農山漁村の受入体制の整備や小学校の活動への支援等を通じて、農山漁村に長期に滞在し農林漁業体験、自然体験、生活体験等を行う活動を推進する。さらに、農林漁家民宿の開業への支援や交流・体験施設の整備等により、家族ぐるみでの交流や子ども団体受入等を進め、都市と農山漁村の共生・対流の促進を図る。</p>	<p>(都市と農山漁村の交流の促進) 農山漁村や農林水産業への関心と理解を促すため、農山漁村の受入体制の整備や交流・体験施設の整備、農林漁家民宿の開業等を通じて、農林漁業体験等を行う体験型修学旅行や家族旅行等の受入を進め、都市と農山漁村の交流の促進を図る。</p>	
<p>(地域等での多様な活動) 子どもの心と体の健全な発展を促すため、青少年教育施設や学校、地域の青少年団体、NPO等の様々な場における、<u>環境学習・自然体験、集団宿泊体験、奉仕体験、スポーツ活動、芸術・伝統文化体験</u>、といった様々な体験活動や、異世代間・地域間交流等の多様な活動の機会の提供について推進する。</p>	<p>(地域等での多様な活動) 集団や社会の一員としての自主的、社会的な態度を身につけるため、青少年教育施設や学校、地域の青少年団体、NPO等が提供する様々な場における、<u>環境学習・自然体験、集団宿泊体験、奉仕体験、スポーツ活動、芸術・伝統文化体験</u>、といった様々な体験活動や、異世代間・地域間交流等の多様な活動の機会の提供について推進する。教員や青少年団体等、青少年を指導する者への適切な情報提供と問題の共有を図る機会を提供する。</p>	
<p>(ボランティアなど社会奉仕体験活動) 各地域のボランティア活動支援センターにおける活動希望者と受け入れ先との効果的なマッチング方法や、関係団体・機関との連携、支援センターの運営等に関する調査研究を実施し、青少年がボランティア活動を通じて地域社会への活動に参画することを支援する。</p>	<p>(ボランティアなど社会奉仕体験活動) ボランティア活動希望者と受け入れ先との効果的なマッチング方法等に関する調査研究や、<u>高等学校を対象とした社会奉仕活動プログラムの調査研究等</u>を実施する。また、青少年教育施設等におけるボランティアに関する事業等を実施し、青少年がボランティア活動を通じて市民性・社会性を獲得し、地域社会へ参画することを支援する。</p>	

学童期	思春期	青年期及びポスト青年期
	<p>(勤労観・職業観と職業に関する知識、技能の育成) 若者の勤労観や社会性を養い、将来の職業や生き方についての自覚に資するよう、学校、企業、経済団体、PTA、NPO等の協力を得て、関係府省の連携により、小学校段階からの組織的、系統的なキャリア教育及び職業教育を推進する。特に、<u>中学校を中心とした職場体験活動</u>、普通科高等学校におけるキャリア教育、及び専門高等学校における職業教育の推進を図る。また、地域一体となったキャリア教育の更なる推進のため、学校と地域産業界の仲介役となる民間主体のコーディネーターを育成する取組を促す。学生が男子向け・女子向けとされる職種にとらわれることなく、主体的に職業選択を行うことができるよう情報提供等の支援を行う。</p>	<p>(社会貢献活動) ボランティア活動希望者と受け入れ先との効果的なマッチング方法等に関する調査研究や、高等学校を対象とした社会奉仕活動プログラムの調査研究等を実施する。また、青少年教育施設等におけるボランティア活動に関する研修等を実施し、青少年がボランティア活動を通じて市民性・社会性を獲得し、地域社会への参画を支援する。さらに、青少年が地域の担い手として、次世代の育成や伝統文化の継承等の活動に取り組むことを支援する。(以下、国際理解)</p>

「発達」に関する記述

(国立青少年教育振興機構「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」H22.5)

小学校低学年では友だちや動植物とのかかわり、小学校高学年から中学生では地域活動が大切である。

[小学校低学年]

	自然体験	動植物とのかかわり	友だちとの遊び	地域活動	家族行事	家事手伝い
自尊感情						
共生感						
意欲・関心						
規範意識						
職業意識						
人間関係能力						
文化的作法・教養						

[小学校高学年]

	自然体験	動植物とのかかわり	友だちとの遊び	地域活動	家族行事	家事手伝い
自尊感情						
共生感						
意欲・関心						
規範意識						
職業意識						
人間関係能力						
文化的作法・教養						

[中学校]

	自然体験	動植物とのかかわり	友だちとの遊び	地域活動	家族行事	家事手伝い
自尊感情						
共生感						
意欲・関心						
規範意識						
職業意識						
人間関係能力						
文化的作法・教養						

20代から60代の成人5,000人(各世代で男女各500人)を対象に、子どもの頃の体験とそれらを通じて得られる資質や能力(体験の力)の関係性を検証。「子どもの頃の体験(横軸)」と「体験の力(縦軸)」を分析(重回帰分析)し、年齢期ごとに「子どもの頃の体験」と「体験の力」に強い相関が見られた体験に示した。